

「プロビデンス号の航跡と大航海時代」

宮古郷土史研究会 池城 直

はじめに

大航海時代には、宮古島近海にも数多くの異国船が現れた。その中には上野沖で台風により 1873 年に遭難座礁したロベルトソン号が、その後の博愛記念碑も相俟ってよく知られているが、池間島沖の八重干瀬で 1797 年に座礁し、池間島民に救助されて、手厚いもてなしを受けて送り返されたプロビデンス号も知られている。それ以外にも吉野海岸で遭難し、多くのバラストが散乱している名も知れぬ遭難船、多良間島沖で遭難したオランダ船のフォン・ボッセ号や来間島沖にも遭難船の形跡がある。

JICA でソロモンとフィジーの南太平洋に勤務中にパンの木運搬船の「バウンティ号の反乱」を知った。その後宮古に帰郷して英国の軍艦プロビデンス号の沈没のを知り、いろいろ調べていくうちに同船も元々はパンの木運搬船であり、興味深いことにバウンティ号との関係が深いことがわかった

本稿においては、プロビデンス号船長の航海記やその他の文献に基づき、その生い立ち、航跡、座礁等の顛末、及びその当時関連する大航海時代の話題、並びに関連情報を記すこととする。

なお、本稿は 2024 年 2 月 18 日に行われた「2023 年度おきなわ県民カレッジ第 4 回宮古地区講座『プロビデンス号の航跡と大航海時代』」の講演で参考資料として配付している。

1. プロビデンス号の生い立ち

プロビデンス号と船名が付く船は、1637 年から 1900 年の 270 年間に 12 隻が建造され、1797 年に八重干瀬沖で遭難したのは 1791 年建造の 9 隻目のプロビデンス号である。この船は当初南太平洋からカリブ海へ「パンの木」を運搬する目的のために建造されたが、後日イギリス海軍の軍艦に艦装され、世界周航の航海に出帆した。

9 号の航海の目的は、当時世界中の植民地拡張に狂奔（競争）していたイギリスが、世界各国に軍艦を派遣し、各地の海岸線の測量、住民の調査を通じて植民地化するために及び、寄港に適した地の事前調査



写真 1：1997 年のプロビデンス号来航 200 周年祭で展示された模型（15 分の 1 スケール）

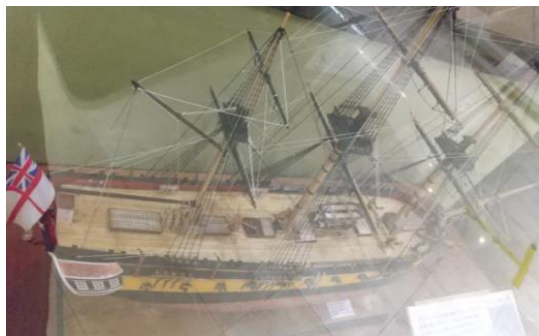


写真 2：2023 年帆船模型 in 沖縄会員の新崎寿浩氏が作成し博物館に寄贈（38 分の 1 スケール）

- ① 1795年2月；イギリスの軍港プリマスを出港。アフリカ西海岸のカナリア諸島、ヴェルデ諸島を南下し、大西洋を横断してリオデジャネイロに寄港し、喜望峰周りでインド洋に入る。
- ② 1795年末から翌年1796年2月；南太平洋、ハワイ諸島を調査。
- ③ 1796年3月～6月；北アメリカ大陸のバンクーバー島、サンフランシスコ湾、モンテレー湾を探検。次の航海の目的地を模索した時、当時地球上に残された空白地帯は二つあり、一つは南米大陸の南部海岸、もう一つは日本周辺海域を含む北東アジアの海岸線であった。大方の士官の賛成とブロートン船長の判断により後者に向かうことが選択されたが、これが運命の分かれ目となった。
- ④ 1796年9月～10月末；太平洋を横断し、蝦夷地に到達。同地と千島列島を探検
- ⑤ 1796年11月；日本近海の太平洋側の伊豆諸島や豊後水道を南下し、種子島まで到達
- ⑥ 1796年12月；沖縄本島、宮古島、八重山周辺、及び台湾周辺を計測し、マカオに行き1797年4月まで滞在
- ⑦ 1797年4月；マカオを出帆台湾経由で琉球諸島に入る
- ⑧ 1797年5月17日；与那国島、八重山を経由して宮古島沖に現れ、17日八重干瀬で座礁・沈没
5月24日；座礁を免れたスクーナー船（*注1）で宮古島を出帆
この17日の間、宮古島島民がいかに親身になって水や食料などを援助したか、ブロートン艦長の航海記の中に克明に記されているし、上野沖のロベルトソン号の遭難時も一晩中火を焚いて船員を勇気づけたと書かれている。漂着船に対するこのような対応に対し、幾つかの航海記でも、親切な人々、代償を求めない無欲、無垢な人たち、《親切な琉球人》として書かれている(Noble Savage:高貴な未開人的発想か)。勿論、宮古をはじめ沖縄の人々は親切であるが、これは琉球王朝の当時の対応方針である。
即ち、(異国)船が難船・破船などになった場合は「夜中かがり火を立て、船を出して人命を救助するのは勿論、御用物・私物などの荷物を引き揚げ、諸々に手抜きなく取り計らう様と規定されている。(与世山親方宮古島規模帳)
- ⑨ 1797年5月末；台湾を経由して6月にマカオに入港。
- ⑩ 1797年6月；マカオを出帆し、澎湖諸島、台湾を経由して再度琉球諸島に入る
尖閣諸島や慶良間諸島、沖縄本島、与論島に寄港する。
- ⑪ 1797年7月～8月；日本近海太平洋側の種子島、潮岬、伊勢湾、伊豆諸島、松島等を経由し北上
- ⑫ 1797年8月～9月；北海道(当時の松前藩)に到達し、室蘭港、函館、天売島、礼文島等を調査
- ⑬ 1797年9月；サハリン島等を探検
- ⑭ 1797年10月；ナホトカやウラジオストクを訪ねた後、韓国の済州島を訪ねる。
- ⑮ 1797年11月；トカラ列島、尖閣諸島等を巡り、マカオに帰還
補足；ブロートン船長のその後
- ⑯ 1798年；セイロン島(現在のスリランカ島)でスクーナー船を降りる
- ⑰ 1800年；イギリスへ帰国

(*註1：スクーナー船；Schooner 船とは、2本以上のマストが張られた縦帆帆走を特徴とする帆船の一種。プロビデンス号同伴船のスクーナー船は87トン、プロビデンス号本船は3本マストの帆船で406トン)

⑱ 1804 年；池間島沖での座礁を含む「北太平洋探検航海記」を出版

⑲ 1821 年；赴任先のイタリア、フィレンツェで客死

3. バウンティ号の叛乱

1787 年 12 月ブライ艦長率いるイギリス海軍船「バウンティ号」は、熱帯の果実であるパンの木を南太平洋の島タヒチから西インド諸島の砂糖プランテーションで働く奴隷の食料として運ぶために、イギリスのポーツマス港を出航した。10 ヶ月後の 1788 年 10 月にタヒチに到着し、5 ヶ月間滞在して昼はパンの木を集め、夜は酒盛りをして楽園生活を満喫した。

1789 年タヒチを出航し、喜望峰経由で西インド諸島に向かっているときにトンガの近海で、反乱が起こり成功した。

首謀者は航海士のクリスチャンであり、乗組員 44 人のうち反乱者が 12 人、19 人は艦長派、13 人は非反乱者であった。ブライ艦長以下 19 人は小さな救命艇に乗せられ六分儀とわずかな食料で追放されたが、艦長の統率と優れた航海術により 41 日後にティモール島にたどり着いた。



図 2：ブライ艦長と船員の一部を「バウンティ」から追放する反乱者たち（1789 年 4 月 29 日）

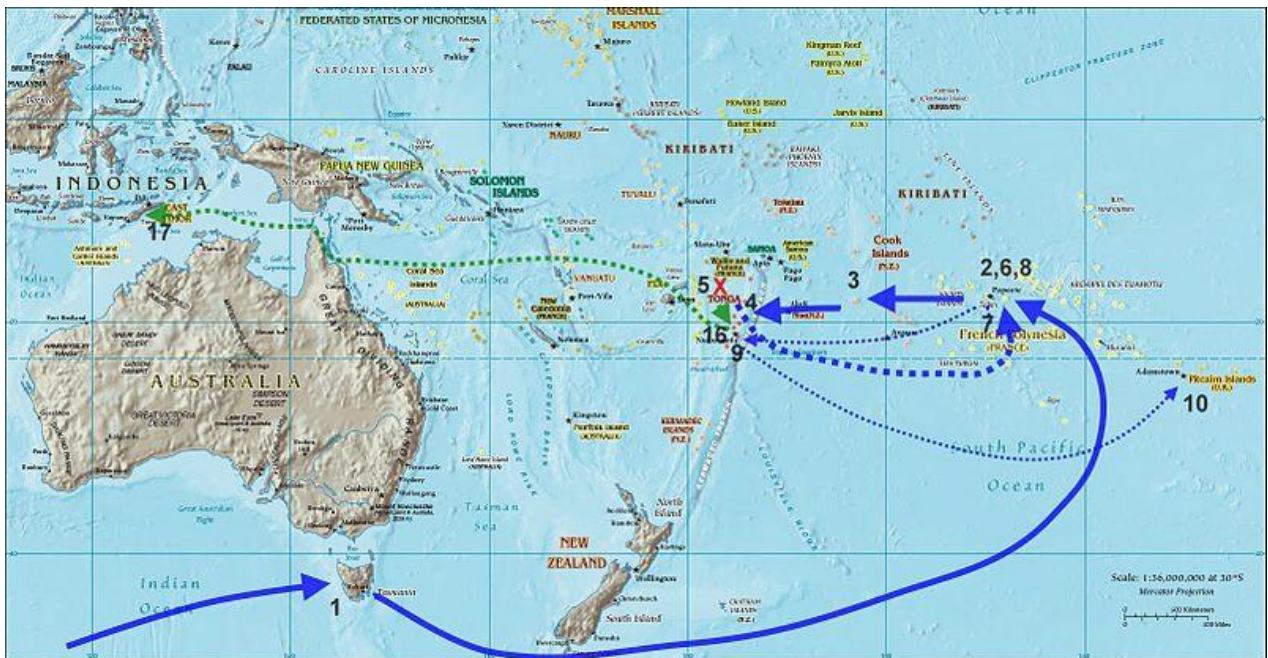


図 3 バウンティ号とその乗組員の辿った航跡

→；バウンティ号の航跡（No.1 タスマニア島、2.タヒチ島、3.クック諸島、4.フィジー諸島）

X 赤ペケ印：トンガ近海で反乱発生（No.5）

青太及び青細破線；反乱船員がバウンティ号を略奪した後の航跡（No.10 ピトケアン島に辿り着く）

反乱者が乗ったバウンティ号は一旦タヒチに戻り同島人 18 人も乗せて、フィジー、クック諸島を経て当時地図にも記載されてない絶海の孤島ピトケアン島に 1790 年 1 月に辿り着いた。反乱者は発見される

ことを恐れてバウンティ号を解体し、その資材を活用して島での生活を始めた。

反乱の原因は、ブライ艦長はパンの木への散水は許可するものの、船員の飲料水は制限する等規律に厳しく、また、船員はタヒチでの楽園のような生活が忘れられず、南太平洋の島に永住したいと熱望して反乱を起こしたといわれている。

軍艦上での反乱は大罪なので、イギリス海軍はブライ艦長の報告を受けて直ちに捜索船を派遣したが、地図上にはないピトケアン島まで辿り着くことができなかった。即ち反乱者達を発見できなかった。挙げ句に、ニュージーランド沖で座礁、沈没し反乱囚人を含む 35 人が死亡した。

4. バウンティ号とプロビデンス号の関係

1789 年；ブライ艦長指揮下のバウンティ号で反乱勃発

1791 年～93 年；反乱、漂流から無事生還したブライ艦長は後に池間島沖で座礁するプロビデンス 9 号の船長となりパンの木をタヒチから西インド諸島に運搬し、2000 本以上をジャマイカやセントビンセントに移植する。

1795 年 10 月；プロビデンス 9 号が軍艦に艀装され、ブロートンが艦長として乗り込み探検に出発

同年 11 月；プロビデンス 9 号がタヒチ島沖で曳航索を使って水深を計測しているときに、偶然錨を海底から引き揚げる。この錨はあのバウンティ号のもので、残った反乱者たちが錨索を切って、脱出したときの置き土産であった。

1797 年 5 月；プロビデンス 9 号池間島沖の八重干瀬で座礁・沈没

この時僚船で補助艦のスクナー船で脱出したが、このスクナー船は数奇な運命を辿った船である。そもそもバウンティ号叛乱の叛乱者達が逃亡用にタヒチで建造した船であった。

その後叛乱船を追跡したイギリス海軍により拿捕され、ジャワ（現在のインドネシア）で売却された。

1796 年 1 月に、プロビデンス号船長ブロートンはこの船がハワイ沖を航行するのを遠目に見た。

その年の 12 月、マカオにてブロートンが購入してイギリス海軍所属となり、八重干瀬まで同行することとなる。ブロートンの航海が完了した後はイギリス海軍 10 番目のプロビデンス号となって、東インドで就役した。

1804 年のフランス・ナポレオンとの戦い、ブローニュの海戦（*注2）で火船となってその役目を終えた。

5. その後のピトケアン島

- ・バウンティ号の叛乱者 9 人はタヒチ人 18 人も同行し、フィジー、クック諸島を経てピトケアン島に 1790 年 1 月に辿り着いた。有用品を陸揚げした後、発見されるのを防ぐために船を燃やした。
- ・その後、女性の取り合いや疾病、喧嘩等で大多数が死亡し、1808 年にアメリカ船が寄港したときは、バウンティ号の乗組員は水夫一人のみが生き残り、子供 20 数名とタヒチの女性 10 人のみが生き残っていた。
- ・1999 年少女に対する性的虐待事件が発生し、2004 年 6 人の被告に対して、有罪が宣告された。

（*注2：ブローニュの海戦；ナポレオン戦争中の 1804 年にイギリス海軍によりフランスのブローニュ港の要塞が攻撃された）

6. パンの木とは

反乱船バウンティ号と遭難船プロビデンス号が当初従事したのは、南太平洋から西インド諸島へのパンの木の運搬であった。コロンブスがアメリカへ到達する以前は西インド諸島、即ちカリブ海諸島には多くのインディオ部族が居住していたが、コロンブスの4度に亘る航海により酷使、病気の蔓延、戦さ等により絶滅した部族は少なくない。その頃イギリスではアフタヌーン・ティーの習慣が流行り、砂糖の需要が増大した。西インド諸島がサトウキビ栽培に適していたが、インディオが激減したのでアフリカから黒人奴隷を強制連行してサトウキビ農場で酷使した。

サトウキビ栽培はモノカルチャーで、食料等は栽培しないので、奴隷の食料を確保するために栽培が容易で栄養価が高いパンの木が注目されたのである。

パンの木は1本の木から500個以上の実がとれ、調理法は簡単で、火にくべて熱くなった時点で焼き芋のように食したり、油で炒めたりする。

宮古島でパンの木が植えられている場所は、熱帯植物園と下地前浜近くの観光農園である。

植物園のパンの木の由来について、市のみどり推進課や現場で働く人たちに聞いたが、半世紀以上も前に設営した植物園であり、記録と記憶にないとのことであった。植物園の説明書に開設当初ハワイからも植物を移入したと記されているので、多分ハワイ生まれであろう。

植物園のパンの木も毎年多くの実を産出しているが、現場の人に処分方法について聞くと、食べたことはないそうで、毎年廃棄に困っているとのことであった。

そも、宮古には毎年台風が襲来し、実が熟する前に強風で落とされるので、食するまでには至らないようである。

7. 熱帯植物園の「パンの木」の年間推移

植物園のパンの木の推移



2023年3月29日（着果前）



同年7月1日

（1本の枝に5～6個の実；全部で500個以上！）



8月3日の台風6号による落果

8. プロビデンス号来航 200 年記念祭の開催

- ・安谷屋昭さんを委員長として「プロビデンス号来航 200 年記念祭実行委員会」を結成し、1997 年 5 月 1 日～31 日に実施
- ・来賓として当時の在日英国大使夫妻、室蘭市長等の関係者が招待され、当時イギリス領土であった香港から帆船「ジ・フン（志風）」号が来航⇒池間島や伊良部島の遠見台（火番盛）から狼煙を上げる。
- ・来航 200 周年記念碑を「プロ号公園」に建立

参考・引用文献

(1) 書籍

- ①長嶺 孝次著 1997 年発行 『探求』 池間プロビデンス号を語る会
- ②ウィリアム・ロバート・ブロートン著 吉田俊則訳・解説 2021 年発行『ブロートン北太平洋航海記』 東洋書店新社
- ③プロビデンス号来航 200 年記念祭実行委員会著 1998 年発行『プロビデンス号来航 200 年記念祭報告書』プロビデンス号来航 200 年記念祭実行委員会 委員長 安谷屋昭
- ④プロビデンス号来航 200 年記念祭実行委員会著 1997 年発行『プロビデンス号と八重干瀬』プロビデンス号来航 200 年記念祭実行委員会
- ⑤南西諸島水中文化遺産研究会著 2014 年発行 『沖縄の水中文化遺産』 ボーダーインク社
- ⑥大城 立裕著 200 年発行 『水の盛装』朝日新聞社
- ⑦砂川 玄正著 1995 年発行(1)『南蛮船・阿蘭陀船「通船・漂着・破損之時公事」(2)『「蔵元文書」と「船長日記」に見るロバートソン号遭難救助の顛末』平良市総合博物館紀要第 2 号 P.1 及び P.37
- ⑧印東 道子著 2017 年発行『島に住む人類』臨川書店

(2)映画

- ①フランクロイド監督 1935 年製作「戦艦バウンティ号の叛乱」クラークゲーブル主演